

# 大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

## Outcome report

計画名 Plan	世界教育研究学会での発表および独仏の言語景観に関する調査
氏名 Name	寺村 優里
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻 博士後期課程 3回
渡航国 Country	フランス、ドイツ、スウェーデン
渡航日程 Travel schedule	2025年 9月 15日 ~ 2025年 9月 29日

### 渡航計画の概要 Outline of the travel plan

申請者は、外国語学習における言語意識を高める教育アプローチ（以下、言語意識アプローチ）について研究を行っている。本渡航では、フランス、ドイツ、スウェーデンに滞在し、(1) 独仏の言語景観の観察、(2) 国際学会での口頭発表を主とする研究活動を行なった。



#### (1) 教材開発のための言語景観資料の収集

9月17日から19日にルクセンブルク大学 Ehrhart 博士の企画するフランス・オットロットからドイツ・アイビンゲンを巡る言語景観ツアーに参加し、フランス・ドイツの国境付近の言語景観に関する視覚資料、文献などの一次資料を収集した。

#### (2) 国際学会における研究発表

2025年9月23日から2025年9月27日の5日間、スウェーデン・リンショーピング大学ノルヒェーピン キャンパスで開催される“WERA TASK FORCE Global Research in Extended Education Conference”において、申請者の研究成果“The Impact of the Language Apprenticeship Approach on Improving Japanese High School Students’ Awareness of Languages”を発表した。西欧を中心とする研究者や博士後期課程の学生と交流し、ネットワークの形成および情報交換を行なった。

### 成果 Outcome

本渡航の成果は以下の通りである。

#### (1) フランス・ドイツの国境における言語景観およびフランス・アルザス地方の歴史に関する資料獲得

2025年9月17日から2025年9月19日の3日間、Ehrhart 博士によるフランス・オットロットからドイツ・アイビンゲンをめぐる言語景観に関する調査ツアーに参加した。言語景観とは、公共空間における視覚的な言語情報である。調査ツアーで巡る地域は、フランスとドイツの国境付近に位置し、複数の言語文化が交錯した歴史的背景を有し、多言語表記や看板、公共空間に見られる言語景観が特色となっている地域である。この調査を通じて、申請者は言語意識を育成するための教材開発に資する実物資料（写真、動画、観察メモ等）を収集した。今後は Ehrhart 博士の協力のもと、それらを日本の言語景観と比較する教育実践を行

う予定である。さらに、同ツアーに参加したフランス・アルザス地方に住むフランス人（60-80 歳）から、アルザス地方の歴史や言語教育に関するライフストーリーを聞くことができ、アルザス地方の第二次世界大戦前および 1990 年代の地図、1960 年代に使われていた初等教育の教科書などの一次資料を撮影させていただいた。

## (2) 博士論文に関するフィードバックの獲得

上記のツアー中に Ehrhart 博士はじめとする研究者に向けて博士論文に関するプレゼンを実施したほか、9 月 23 日から 24 日に行われた国際学会“WERA TASK FORCE Global Research in Extended Education Conference”の博士後期課程向けの Pre-Conference においても博士課程の学生 20 名、研究者 4 名に対して博士論文に関してプレゼンを行い、フィードバックを得た。これにより、報告者の博士論文に関する国際的な意義を明確にすることができたほか、共同研究の可能性が得られた。

## (3) 国際学会における研究発表

- ・ Individual Paper Presentation (Peer-reviewed) Yuri TERAMURA, The Impact of the Language Apprenticeship Approach on Improving Japanese High School Students' Awareness of Languages, WERA Task Force Global Research in Extended Education Conference, Linköping University, pp. 161-162, 2025.09.26.

発表では、オーストラリアおよびスウェーデンの研究者から国際的な研究意義をコメントいただくとともに、共同研究の依頼をいただいた。また、他の研究者からは日本の言語教育への質問や、さらなるデータ数拡大への期待を寄せるコメントをいただいた。

## (4) スウェーデンの教育現場への訪問



訪問の様子

学会の会期中にスウェーデンの教育現場（① Söderporten 学校、② Frinavet Youth Centre）の 2 箇所を訪問した。スウェーデンの移民増加に伴う学校運営の変化や言語教育の対応、そして教師が直面する課題について議論を深めた。児童・生徒の 90%を移民出自が占める現場において、そのうちの 40%はスウェーデン語を話せない中、教師は授業だけでなく掲示などにも工夫を凝らしている様子が見られた。また、Frinavet Youth Centre では子どもたちが施設運営費を得るため、地方行政に手紙を出したり、購入品を議論で決めたりと民主主義的なプロセスを体得する様子が観察された。

## 今後の展望 Prospects for the future

本渡航を通して得た知見および資料を活かし、言語意識アプローチの理念と実践の発展に貢献できるよう、研鑽する。発表した研究成果を論文として投稿することを目標とするほか、学会や Ehrhart 博士からのフィードバックをもとに博士論文の執筆を進め、収集した資料を用い実践研究を行う予定である。